

【授業実践開発班：オ 世界史B 単元「百年戦争 14～15世紀の西ヨーロッパにおける中央集権化】

百年戦争 14～15世紀の西ヨーロッパにおける中央集権化

一日欧教科書比較・メモリーツリー・効果的な事前／事後学習を用いた歴史解釈の授業

1 はじめに

日本における百年戦争に関する理解は「フランス王位継承権を巡る争い」「ジャンヌ＝ダルクが活躍してフランスを救った」というイメージが強い。一方で、教科書の記述は近年の研究動向の反映の程度に差があり、記述内容に違いが見られる。そこで、百年戦争を記述した複数の資料（日本の5種と欧州共通教科書の記述）を比較する授業を計画した。この実践では歴史叙述における視点設定の重要性に気付かせることを目標の第一とする。それと共に、自ら設定した視点から、百年戦争を通して中世後期（十字軍以降）から近世にかけての西ヨーロッパ社会の変化を表現させる。これにより、中世ヨーロッパ史の単元全体を振り返り、概観させることを目標の第二とする。

なお、生徒に身に付けさせたい力（期待される生徒の変容）は以下の3点である。

- ・複数の資料から、歴史叙述における視点の多様性を認める力。
- ・自分で立てた視点を基に、情報を要約し、説明する能力。
- ・具体的な事象から、時代の変化を読み取り、自分の言葉で表現できる力。

2 実施する科目 世界史B

3 日時・場所 令和元年11月5日（火）第4,5限 社会科教室

4 学級 2年4・5組世界史選択者,6組（2講座） 男子18名 女子44名 計62名

5 単元名 第5章 ヨーロッパ世界の形成と発展 3 ヨーロッパ中世世界の変容 百年戦争

6 単元の目標

- ・百年戦争に関する各州活動を通じて、学び合った点や理解が進んだ点を自ら見いださせる。
- ・他者の視点を参考にしながら、根拠をもって自分なりの視点を立て、大きな時代の変化を読み取らせる。
- ・百年戦争を記述した複数の資料（教科書記述）を比較し、その視点の違いを読み取らせる。
- ・百年戦争に新たな名称を付けることで戦争の意義を理解し、それを基に、資料を要約させる。

7 単元の指導計画

(1) 単元の配当時間（3.5時間）

- ・西欧中世社会の特色（復習） 0.5時間
- ・百年戦争 2時間（本時＝1／2時間）
- ・百年戦争の意義 1時間

(2) 単元の評価規準

関心・意欲・態度	思考・判断・表現	資料活用の技能	知識・理解
単元の前半と後半の学習活動の成果を比較することで、今回の学習活動によって、学び合った点や自分の理解が進んだ点を自ら見いだせている。	他者の視点を参考にしつつ、根拠をもって自分なりの視点を立て、大きな時代の変化を読み取れている。	複数の資料（教科書記述）を比較し、その視点の違いを読み取っている。	百年戦争に新たな名称を付けることで戦争の意義を理解し、それを基に、資料（『欧州共通教科書』）を要約できている。

(3) 指導と評価の計画（3.5時間）

次程	ねらい・学習活動等	関	思	技	知	評価規準等
第一次 （1時間）	【ねらい】封建制を中心とした西欧中世社会の特色を理解し、百年戦争の意義を考察する意欲を高める。					
	<ul style="list-style-type: none"> ・西欧中世の封建的主従関係における国王権・11世紀以降のイングランド領の変遷・十字軍以降のヨーロッパ社会の変化を復習する。 ・百年戦争に関する教科書記述をまとめ、疑問に思った点や、より学びたい点を挙げる。 	●				<ul style="list-style-type: none"> ● 既習範囲の要点が理解できている。（ワークシート） ● 百年戦争に関して、主体的に学ぶ意欲を示している。（ワークシート・まとめ図）
第二次 （2時間）	【ねらい】百年戦争に関する歴史叙述比較から課題を見だし、百年戦争から読み取れる西欧中世社会の変化を説明する。					
	<ul style="list-style-type: none"> ・教科書記述を比較する。 ・百年戦争の叙述の歴史的背景を踏まえ、自分なりの視点を立てる。 ・自分の視点に即した新名称を付ける。 ・第一次で疑問に思った点を質疑応答や映像視聴により学ぶ。 ・自分の新名称を踏まえて資料（『欧州共通教科書』）を読みとり、内容をまとめる。 	●		●	●	<ul style="list-style-type: none"> ● 教科書ごとの記述における視点の違いを読み取ることができる。（ワークシート） ● 資料を基に自分なりの視点を立てることができる。（ワークシート） ● 自分の視点と読み取りを基に、百年戦争の特色を理解できている。（新名称の作成） ● 事実に即して、理解を深めている。（質疑応答等） ● 自分の視点を基に、資料を要約できている。（ワークシート・まとめ図）

第三次 （1時間）	【ねらい】他の生徒の学習活動から，自分の学習成果を客観的に分析する。			
	・各生徒の学習成果の比較から，大きな時代の変化を読みとる。	●		・他の生徒の学習活動から，自分が時代の変化を読みとれているか自己分析できている。 (ワークシート)
事後	・振り返り	●		・学習活動を通じて，自分が学んだ点や気付いた点をまとめ，歴史的思考力を身に付ける態度を育てている。 (ワークシート)

8 本時の学習

- (1) 本時の目標 百年戦争に関する歴史叙述比較から課題を見いださせ，自分の視点に即した新名称を考える。
- (2) 教材 『詳説世界史B』（山川出版社），『ニューステージ 世界史詳覧』（浜島書店），ワークシート
- (3) 本時の指導計画

	学習内容	学習活動	指導上の留意点	評価の観点 ・評価方法
導入 （2分）	・班別学習の準備	・5人1組で資料を回覧しやすいよう，着席する。	・班別学習がしやすいよう，机の位置等に注意する。	
展開1 （28分）	・資料（教科書記述）の比較 ・叙述の違いによる歴史的背景の	・各資料の記述の違いをグループで比較する。 教科書記述の比較を通じて，同一事象に対して異なる叙述が可能なことを認識することで，学習意欲を高める。 戦争の原因や展開の理解について，複数の考え方があることを理解する。 ・百年戦争という名称の成立やジャンヌ＝ダルク頭	・ワークシート2の資料A～Eを1分ごとに回し読みさせる。その際，自分の記述と大きく異なる部分に付箋をつけさせる。 <ワークシート2> <ワークシート1 step3> <ワークシート1 step4>	

	<p>理解</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「百年戦争」の意義の考察 	<p>彰が19世紀のナショナリズム高揚という時代背景に基づくものである点に気付く。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・グループで意見交換を行い、それを踏まえて、自分なりの仮の視点を立て、「百年戦争」に代わる新たな名称案を考える。 	<p>(発問)</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「あなたは、どのような視点から、どう名付けますか？」 <p>参考事例を提示し、思考を活性化させる。</p> <p><ワークシート1 step5 ></p>	<p>【知識・理解】 (新名称の作成)</p>
<p>展開2 (20分)</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・振り返り ・課題提示 	<ul style="list-style-type: none"> ・立てた視点により、資料から取り上げるべき語句が異なることを意識する。 ・資料(『欧州共通教科書』)を読み、日本の教科書との記述の違いを比較する。自分の考えた名称を説明するのにふさわしい語句を資料から選び出す。 	<ul style="list-style-type: none"> ・各自が考案した仮の名称を班内で発表させ、その名称を付けた理由を説明させる。 ・ヨーロッパでの歴史叙述を紹介する。 <p><ワークシート1 step6 > <参考資料></p>	

(4) 本時の評価基準

・新名称の作成の評価基準 【知識・理解】

「自分の視点と読み取りを基に、百年戦争の特色を理解している」

「おおむね満足できる」状況(B)と評価される例
・自分の視点と読み取りを基に、百年戦争の特色を理解し、それに代わる名称を考案できている。
「十分満足できる」状況(A)と評価される例
・自分の視点と読み取りを基に、百年戦争の特色を的確に深く理解し、その理解に即した適切な名称を考案できている。
「努力を要する」状況(C)と評価される生徒の例と教師の指導
・自分の視点と読み取りを基に、百年戦争の特色を理解できていない。 次時で個別に助言する。

9 生徒が見方・考え方を働かせた場面 (ワークシート 1 step5, 6を参照)

(1) 指導計画 第二次 1時間目

自分なりの仮の視点を立て、「百年戦争」に代わる新たな名称案を考える。

ア 期待される生徒の変容 百年戦争を、単なる英仏間の対立として見ることから脱却する。

イ 実践における生徒の解答例

(ア) 戦争の結果、イングランドとフランスが分離したことに着目した例

・イングランド誕生 ・英仏両断戦争 ・英仏分離戦争 ・英仏二重帝国の解体

(イ) 王権の強化に着目した例

・戦いの中で形成された「国家」 ・(英仏) 中央集権化戦争
・王権強化戦争 ・フランス国内戦争

(ウ) イングランド王家とフランス王家以外の諸侯の動向に着目した例

・ブルゴーニュ盛衰戦争

(2) 指導計画 第二次 2時間目

資料(『欧州共通教科書』)を基に、百年戦争に代わる新名称に対応したまとめ図を作成する。

ア 評価にあたってのポイント

・上記の新名称に対応したまとめであること(自分が設定した視点に基づいて、資料から必要な語句を抽出し、関連付けることができていること)。

イ 実践における解答例(発表資料にて)

10 研究の成果と今後の課題

(1) 成果

生徒に百年戦争を、単なる英仏王権の王位継承争いという視点ではなく、中世から近世に移行する際の中央集権化の視点から考察させることができた。これは、ヨーロッパ中世の単元のまとめとしても有意義であった。

イギリスとフランス、さらにはベネルクス三国が、最初から個別の国家として発展したのではなく、相互に関連を持ち、百年戦争「後」に現在のような別個の国として発展したという視点に注目させることができた。これにより、近世から近代で扱う主権国家や国民国家、ナショナリズムについて考察する際の大きな手がかりを生徒に示すことができた。

(2) 課題

今回の実践では、生徒の多くは国王権の拡大や中央集権化には着目できたものの、一方で皇帝権や教皇権といった、中世の普遍的な権威が衰退した点に着目できた生徒は少なかった。より広い視野から生徒に考察させる働きかけが必要であった。

新学習指導要領における世界史探究や歴史総合に本実践の成果を反映させるに当たっては、主権国家・国民国家の概念と形成に当たっての歴史的経緯をどれだけ端的に生徒へ提示できるかが課題である。大きな時代の変化を読み取らせるための資料の検討と精選が今後の課題である。

11 参考文献

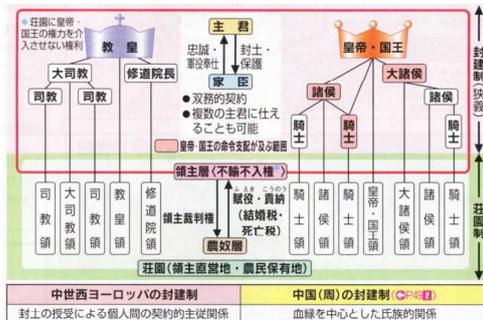
- ・『百年戦争－中世末期の英仏関係－』城戸毅 刀水書房 2010
- ・『英仏百年戦争』佐藤賢一 集英社新書 2003

1 ワークシート1 百年戦争と14~15世紀の英仏

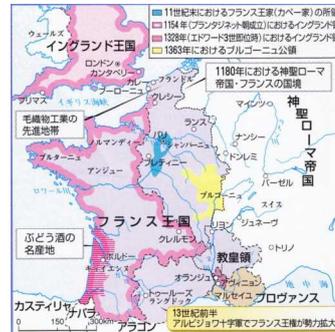
※授業順は、ワークシート (WS) 1 step1→WS 2→WS 1 step 2 ~ 5 (3)→参考資料→WS step 6
step 1 封建的主従関係と中世社会の流れを確認

問 図A Bで国王が直接、農奴に賦役・貢納を納めさせることができた範囲に○印をつけなさい。(図Bはフランス王が賦役・貢納を得た範囲)

図A <封建的主従関係>



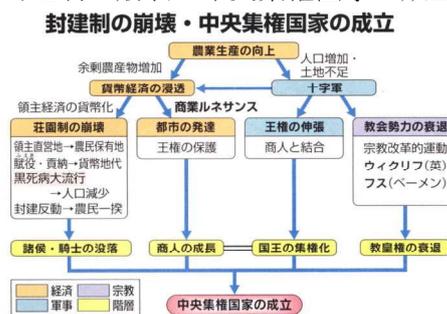
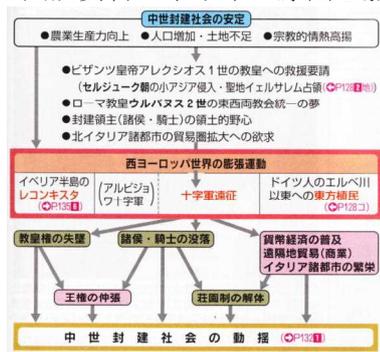
図B <14~15世紀の西ヨーロッパ>



荘園の不輸不入権・領主裁判権を復習し、中世封建制の特色を確認させる。

フランス王の勢力拡大と、百年戦争前期における主な諸侯領を確認させる。

参考：図説資料<十字軍の原因と影響> <封建制の崩壊・中央集権国家の成立>



十字軍以降の中世後半から近世への流れが、中央集権国家の成立にあることを確認させ、その事例の一つが百年戦争であることを認識させる。

step 2 資料読解 →P. 4 ワークシート 2

step 3 資料を比較

- (1)資料A~Eの内容を代表者が発表
- (2)各グループで資料A~Eをまとめた図を見比べて、違いを確認しよう。
→気づいた点にはアンダーライン等の印をつけておく
- (3)資料A~Eの書き方(書いた人の狙いや視点)にはどのような違いがあるだろうか?

step 4 百年戦争って何だ?→「百年戦争」でいいのか?

- Q 1 そもそも「百年戦争」とはいつ名付けられたのか?
 A 1 「百年戦争」の語は19世紀に初めて用いられる。それまでは特別な名称はないと思われる。
- Q 2 百年戦争での有名人といたら、エドワード黒太子とジャンヌ=ダルク?
 A 2 ジャンヌ=ダルクを現在のように評価したのは、ナポレオン1世。
 エドワード黒太子がイギリス(イングランド)で有名になったのも19世紀。

Q3 イングランドとフランスはいつ分かれた？

A3 1822年のアミアンの和約で破棄するまで、イングランド国王はフランス王を名乗っていた。



☆19Cとは・・・ ナショナリズムが高揚＝イギリス・フランスという「国民国家」の存在が大前提に

step 5 百年戦争に別の名前をつけるとしたら・・・？

(1) 戦争の名称の命名パターン

- | | | |
|---|---------------|--|
| ア | 交戦した国名をもとにつける | ex. 普仏戦争・ペルシア戦争・ポエニ戦争など |
| イ | 戦争の期間や規模に由来 | ex. 三十年戦争・七年戦争・第一次世界大戦 |
| ウ | 戦争の争点や主な戦場に由来 | ex. アメリカ独立戦争・イタリア統一戦争・オーストリア継承戦争・アヘン戦争など |

(2) どんな視点から「百年戦争」を見るか？の考え方のヒント

----- 参考 百年戦争で、イングランドとフランスはどのように変化していったのか？ -----
「現代の歴史学では、百年戦争という表現はかならずしも歓迎されていない。その理由の一つにはこの表現が中世末期の王家の争い、王朝的な争点を強調することになり、この戦争をあたかも王位継承戦争であるかのように見せかけることになり、この戦争の真の性質を誤解させることになるからである。」
「(英仏) 両者はそれぞれ、ほとんど完成された国であるようにみえながら、繋がっており、完全に別個の国にはなっていないのである。さらにそれは、一方が他方を支配しているとか、一方が他方に侵入している、とかいった関係とは違う。両者は繋がっており、もつれあい絡みあっていたのである。これをいわば一刀両断に切り離す、外科的大手術の働きをしたのが百年戦争だった」(『百年戦争』城戸毅(元名市大の教授))

①18世紀以前の人なら、「この戦争」をどう記述するか？

- ・ヘンリ4世以前のイングランド王には「イングランド人」意識はなく、フランス語やフランス文化が重視されていた。フランス語を話せない最初のイングランド王がヘンリ5世と言われる。英語しか話さないヘンリ5世はイングランド人として即位した最初のイングランド王とも言える。
 - ・チョーサーが『カンタベリー物語』を英語で著し、イギリスにおけるルネサンスの先駆となったのがヘンリ4世時代。
- ヘンリ4世までは「フランス王」を主張する権利がある？
ヘンリ5世がフランス王を主張するのは、先祖伝来の領土奪還ではなく、外国侵略？

②イングランドから見ると ～シェークスピア史観

- ・シェークスピアは16C末、エリザベス1世のもとイングランドの国力が向上した時代に多くの作品を発表
 - ・シェークスピアは『ヘンリ5世』で、ヘンリ5世をイングランド史上最高の名君と讃える
- イギリスでは現在も「アザンクールの戦いに勝利した後、トロワの和約でヘンリー5世がフランス王シャルル6世の娘と結婚し、まもなく戦争はイングランドの勝利で終結した」と信じる人もいる
(ロビン・ネイランズ『百年戦争』1890・「シェークスピア症候群」)
- この場合、バラ戦争の影響で、ヘンリー6世が大陸の領土を失ったことになる

③ヨーロッパの人々はどう捉えているか ex. 「ヨーロッパ連合」の視点から見ると？

④国家ではなく、民衆の視点から見ると

- ・なぜ、ジャンヌ=ダルクの「フランスを救え」は人々の共感を得たのか？

⑤「中世」や「近世」といった時代区分を意識すると

- ・14～15世紀は「中世」の終わり。「近世」のキーワードは中央集権化(絶対王政) →具体的な変化は？
- ①～⑤の視点をもとに、自分なりに考えるために、参考資料『欧州共通教科書』を見てみよう

(ワークシート1裏面・原寸はA3サイズ)

(3)(1)の命名パターン「ウ」を参考に、「百年戦争(とその時代)」に新しい名前をつけるとしたら…?

・参考にした視点 _____ () ←(2)の①～⑤
その他の場合は()に視点を記入

・新しい名前 () ※「〇〇戦争」でなくてもよい

・命名の理由 _____

step 6 学んだことのまとめ

課題 ヨーロッパの歴史教科書を読んで、自分がつけた名称を基に、その内容をメモリーツリー形式でまとめなさい。

(まとめ図) ※キーワードは最低15個以上用いること (原寸はA4サイズの3/4程度)

- (1) step 5 (3)とこの(まとめ図)、および下記(振り返り)(2)(3)で期待される生徒の変容例
- ・百年戦争を、単なる英仏間の対立として見ることから脱却する。
(「主権国家」「近代国家」の前提から離れた視点で、歴史事象を捉えることができる。)
 - 例1: 教皇・神聖ローマ皇帝や近隣諸国の動向を踏まえ、全ヨーロッパ的な視点で捉える。
 - 例2: 「絶対王政」的な統一国家の対立ではなく、諸侯間の対立に着目できる。
ex. 現在のルクセンブルクの祖となるブルゴーニュ公の盛衰
 - 例3: ペスト・ジャックリーの乱に加え、教皇権や皇帝権の衰退、騎士諸侯の没落などを踏まえて、中世後期の変動を百年戦争の中に見いだすことができる。
 - ・百年戦争の「結果」として、近世的なイングランド・フランスが誕生したことに気付く。
- (2) 評価にあたって、ポイントとなると思われる点 [獲得した力の「見える化」・自己評価]
- ・ step 5 (3)の新名称が、上記の「期待される生徒の変容」に即していること。
 - ・ 新名称と(まとめ図)の内容が、相関関係にあること。
(生徒の理解が不十分だと、両者が遊離した内容となる)
 - ・ 下記(振り返り)で、他者の意見を尊重し、評価しつつ、自分の思考をより深めている。
また、学習前と学習後での自分の認識の変化を、具体的に表現できている。

(振り返り)

- (1) step 5 (3)や6に取り組んだ際に意識した点や工夫した点は何ですか?(箇条書きで可)
- (2) 他の方のネーミングやまとめ図の発表を聞いて(見て)、よいと思った点や気付いたことを書いて下さい(箇条書きで可)。
[他の生徒がつけた名称や、まとめ方を見て、自分の視点を客観化させる]
- (3) 自分のワークシート2(事前にしたまとめ図)と左のstep 6を比較して、自分が新たに学んだ点や気付いた点を書いて下さい(箇条書きで可)。

2 ワークシート2 百年戦争の記述比較

(生徒には5人1班へ資料A～Eの5種類のプリントを配付)

次の資料文を読んで、内容をメモリーツリー形式（普通の授業のまとめファイルで書いている形式）でまとめなさい。

- <注意事項>
- ・資料の太字とアンダーライン部の語句を必ず用いること。
 - ・図説（p. 148～151）と用語集（p. 105ほか）は参考にしてもよいが、教科書・その他資料（インターネット等）は参考にしないこと。
 - ・資料はA～Eまで5種類ありますが、異なる資料は見ないこと。
 - ・まとめる際は、「百年戦争の原因・展開・結果」と「英仏への影響」が分かるように書くとよい。

資料A

フランス国王は毛織物産地として重要な**フランドル地方**を直接支配下におこうとしたが、この地方に羊毛を輸出して利益をあげていたイギリス国王は、フランスがこの地方に勢力をのぼすのを阻止しようとした。**カペー朝**が漸絶して**ヴァロワ朝**がたつと、イギリス国王**エドワード3世**は、母がカペー家出身であることから**フランス王位継承権**を主張し、これをきっかけに両国のあいだに**百年戦争**が始まった。

はじめ**長弓兵**を駆使したイギリス軍が、**クレシーの戦い**でフランス騎士軍を破るなど優勢で、**エドワード黒太子**の活躍により**フランス南西部**を奪った。フランス国内はさらに**黒死病**の流行やジャックリーの乱などで荒廃し、**シャルル7世**のときには王国は崩壊寸前の危機にあった。このとき、国を救えとの神の託宣を信じた農民の娘**ジャンヌ=ダルク**があらわれてフランス軍を率い、**オルレアン**の包囲を破ってイギリス軍を大敗させた。これよりフランスは勢いをもちかえし、ついに**カレー**を除く**全国土**からイギリス軍を追い出して、戦争は**フランスの勝利**に終わった。この長期の戦争のためフランスでは**諸侯・騎士**が没落した。その一方で**シャルル7世**は**大商人**と結んで**財政**をたて直し、**常備軍**を設置したので、以後、**中央集権化**が急速に進展した。

一方、戦後のイギリスでは**ランカスター・ヨーク両家**による**王位継承の内乱**がおこった。これを**バラ戦争**という①。イギリスの**諸侯・騎士**は両派にわかれて激しくたたかったが、その結果、彼らは没落した。結局内乱をおさめたランカスター派の**ヘンリ**が1485年に即位し（**ヘンリ7世**）、**テューダー朝**を開いた。彼は統治制度をととのえ②**王権**に反抗するものを処罰して**絶対王政**に道を開いた。他方、ケルト系の隣国**ウェールズ**は1536年にイギリスに**併合**されたが、**アイルランド**と**スコットランド**はなお独立を保ち続けた。

①両派の記章がそれぞれ赤バラと白バラであったとする後世の想像から、こう呼ばれる。

②ヘンリ7世の後を継いだ国王ヘンリ8世の治世には、17世紀半ばのイギリス革命で**王権乱用**の象徴として廃止されることになる**星室庁裁判所**も整備された。星室庁裁判所という名前は、裁判がウェストミンスター宮殿の「星の間」でおこなわれたのに由来するとされる。

資料B

14世紀にはいると、**プランタジネット朝**のイングランドと**ヴァロワ朝**フランスとの関係が、イングランドの在仏所領をめぐる緊張が緊迫した。両国の武力衝突は、イングランド王**エドワード3世**の**フランス王即位宣言**（1340年）とともに本格化し、戦闘と休戦をくりかえしながら、100年以上にわたり決着をみなかった（**百年戦争**）。当初は**クレシーの戦い**で歩兵長弓隊がフランス騎士軍に勝利するなどイングランド軍が優勢であったが、1429年に**ジャンヌ=ダルク**が**オルレアン**の包囲をといて**シャルル7世**の**国王戴冠**（ランス）を実現すると、フランスの優位に転じた。戦争は、教皇・公会議による和平調停のかいもなく長期化し、両国の財政を著しく疲弊させたあげく、ようやく1453年、イングランド軍の全面撤退（**カレー**をのぞく）によって終結した。

その後、イングランドは長い内乱の時代（**バラ戦争**①）に突入し、国内では、貨幣地代の普及により農民層が分解し、のちに**ジェントリ**と呼ばれる中小領主層や、**独立自営農民**（**ヨーマン**）層が新たに形成された。一方、ようやくイングランドを国土から排除したフランスでは、ヴァロワ朝のもとで中央集権化が進められた。

①**ランカスター家**と**ヨーク家**の対立を軸とした**王位継承戦争**。1485年の**ヘンリ7世**（在位1485～1509）の即位（**テューダー朝**（1485～1603）の創始）によって終結した。戦争の名称は、両家の記章を赤バラと白バラとする伝承に基づき、19世紀にうまれたものである。

資料C

フランスのカペー朝がたえて傍系の**ヴァロワ朝**が跡をつぐと、イングランド王エドワード3世が**フランス王位の継承権**を主張してフランスに侵攻した。これが**百年戦争**のはじまりである。この背景には、毛織物生産のさかんな**フランドル地方**や**ワイン**の産地である**ギューイェヌ地方**をめぐる両国の利害の対立があった。

戦局ははじめ、フランスの有力諸侯である**ブルゴーニュ公国**と同盟をむすんだイングランドが優勢であった。**黒死病**の流行や**ジャックリーの乱**で疲弊したフランスは、**シャルル7世**が即位したころには降伏寸前にまで追いこまれていたが、神のお告げを受けたと信じる農民の娘**ジャンヌ=ダルク**があらわれ、フランス軍の先頭にたつて**オルレアン**の包囲をやぶると、戦局は逆転した。1453年、フランスは**カレー市**をのぞく**全領土**を回復して、戦争は終結した。

百年戦争の結果、フランスでは諸侯や騎士が没落し、シャルル7世は**官僚制**、**常備軍**、**租税制度**を整備することで**王権の強化**をはかった。一方イングランドでは、百年戦争ののち、王位継承をめぐる**ランカスター家**と**ヨーク家**がそれぞれに諸侯や騎士を従えて争う**バラ戦争**がおこった。これをおさめたランカスター派の**ヘンリ7世**は**テューダー朝**をひらき、ウェストミンスター宮殿に**星室庁裁判所**を設けて貴族層の王権への抵抗をおさえた。こうしてイングランドとフランスは、領土をほぼ確定して**中央集権体制**をすすめることで、近世の主権国家へと移行した。

※ジャンヌ=ダルク～預言者として理解されたジャンヌは、オルレアンを解放したのち、イングランド側にとらえられ、女性にもかかわらず**男性の服装をした**ことを理由の一つとされ、異端として火刑に処された。しかし処刑直後から復権を求める声上がり、1456年に復権裁判がなされた。1920年に教皇により聖人に加えられている。

資料D

フランスの**カペー朝**が絶えて傍系の**ヴァロワ朝**があとをつぐと、**イングランド王エドワード3世**はフランス王位の**継承権**を主張してフランスに侵攻し、のちに**百年戦争**とよばれる断続的な戦争がはじまった。背景には、**自国産羊毛の輸出先フランドル**へフランスが進出することをきらう**イングランド**の思惑や、**大陸内のプランタジネット家領地**をめぐる英仏両王家の対立があった。

はじめは**イングランド**が優勢で、15世紀に入ると、フランス国内は、**イングランド**と結んだ**ブルゴーニュ公派**とフランス国王派との**内戦**のような状態となった。ところが、神のお告げを受けたと信じる農民の娘**ジャンヌ=ダルク**が出現し、**オルレアン**の解放を機に、**シャルル7世**が反攻に転じると、フランスは**カレー市**を除く**全領土を確保**して、戦争は終わった。

フランスでは**諸侯・貴族**の力が後退し、**王権**が伸張した。**イングランド**では百年戦争後、**ランカスター家**と**ヨーク家**とが**王位**を争い、貴族が両派に分裂して**バラ戦争**①とよばれる内戦となったが、ランカスター派の**ヘンリ7世**が収集して**テューダー朝**を開いた。テューダー朝は**星室庁裁判所**②を設けて反抗をおさえ、**王権強化**への道を開いた。

※ジャンヌ=ダルク～ジャンヌは最後には**異端**の罪で**火刑**に処せられた。「救国の少女」として称賛されるようになるのは、19世紀末にフランス・ナショナリズムが高揚するなかでのことで、1920年には**聖女**として列せられた。

①ランカスター派を赤いバラ、ヨーク派を白いバラになぞらえることで、19世紀に広まった呼称である。

②国王に直属する特別裁判所。ウェストミンスター宮殿の星の間に設置された。

イングランドとフランスの間で起こった戦争は長期に及び、多くの諸侯が没落し、王権力が力を増していった。

1328年フランスではカペー朝が断絶し、ヴァロワ朝のフィリップ6世が王位を継承した。①1337年フィリップ6世がギューエンヌ地方②の没収を宣言すると、イングランド王エドワード3世は母親がカペー家出身であることからフランス王位継承権を主張し、百年戦争が始まった。③イングランド側はクレシーの戦いやポワティエの戦いで勝利し④終始優勢であった。戦場となったフランスは荒廃し、さらにペスト（黒死病）の流行や農民一揆がそれに追い打ちをかけた。しかし1429年イングランド軍に包囲されたオルレアンがジャンヌ=ダルク⑤の活躍で解放されると、フランス王シャルル7世は攻勢に転じ、1453年にはギューエンヌ地方の中心都市ボルドーを奪回して百年戦争を終結させた。イングランドはカレーを残して大陸の所領を失った。フランスでは長期間にわたる戦争で多くの諸侯が没落し、都市の大商人と手を結んだ王権が急速に力をつけた。

百年戦争で戦場とならなかったイングランドでも、その後、王位継承をめぐるランカスター家とヨーク家の間でばら戦争とよばれる内乱が起り、有力な諸侯が次々と没落していった。1485年に内乱をおさめてテューダー朝を開いたヘンリ7世は、王権に対する反抗を抑えるため、星室庁を整備した。

①イングランド・フランス王家（家系図解説）

～封建社会では女性にも所領の相続権が認められており、相続権をもつ女性との結婚は所領を拡大するための重要な手段であった。そのため、王家や諸侯の間では複雑な婚姻関係が結ばれ、それがしばしば王位や公・伯位をめぐる継承戦争に発展した。

②ギューエンヌ地方～ガロンヌ川下流域のボルドーを中心とする地域で、プランタジネット朝のヘンリ2世以来イングランド王が領有していた。赤ワインの一大産地で、ワインを産出しないイングランドと経済的にも密接な関係をもっていた。

③百年戦争（地図解説）～フランドル伯でもあったブルゴーニュ公はイングランドと同盟関係にあったが、1435年にシャルル7世と和解した。これにより、イングランドとの同盟は解消された。

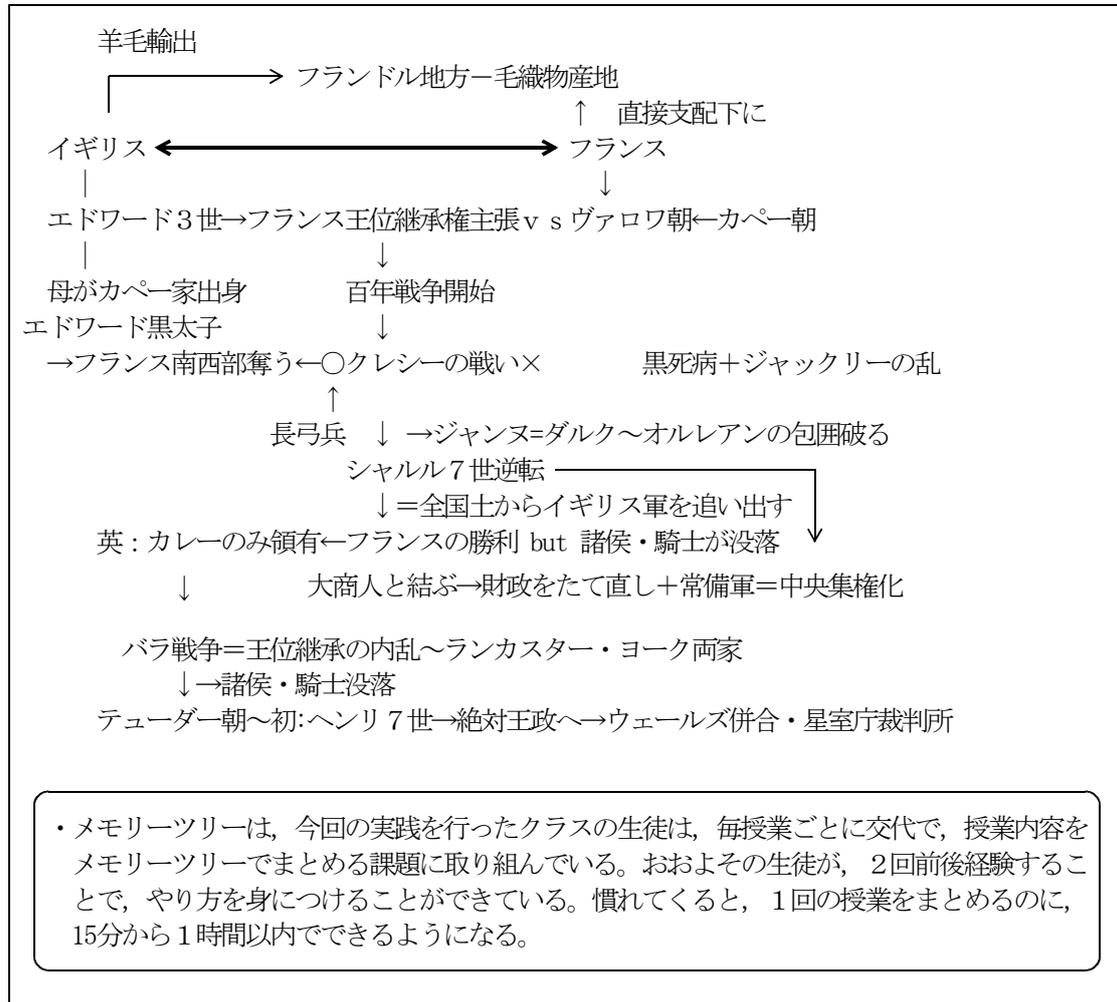
④ポワティエの戦い～黒太子エドワード（エドワード3世の長子）が指揮するイングランド軍はたくみな戦術で勝利し、フランス王ジャン2世を捕虜とした。

⑤ジャンヌ=ダルク裁判～ジャンヌ=ダルクはイングランド側にとらえられ、異端として火刑に処せられた。聖職階層制を無視して彼女が聞いたという神の声にのみ従おうとしたことや、男装したことが異端の理由とされたが、1920年に聖人に列せられた。

※資料A～Eの出典は、最後の「5 参考資料」の欄に記載

3 ワークシート2右半面 (予想される解答例の一例)

資料 A (A~E) サブタイトル イングランドとフランスの中央集権化への道



・メモリーツリーは、今回の実践を行ったクラスの生徒は、毎授業ごとに交代で、授業内容をメモリーツリーでまとめる課題に取り組んでいる。おおよその生徒が、2回前後経験することで、やり方を身につけることができている。慣れてくると、1回の授業をまとめるのに、15分から1時間以内でできるようになる。

まとめをする際に心がけた点・工夫した点は・・・

[歴史事象をまとめ、要点と関連性が他人に伝わるよう表現する際に留意する点を意識させる。]

まとめてみて疑問に思った点・もっと知りたい点などがあれば・・・

[疑問点等を出すことで、自分なりの単元に対する問いを立てさせる。]

(予想される疑問例) ・なぜ、百年間も戦争状態が続いたのか？

- ・エドワード3世にフランス王位を主張する資格があったのか？
- ・英仏以外の他国や、諸侯はこの戦争にどう関わったのか？
- ・なぜ、カレー市のみが最後までイングランド領であったのか？
- ・ジャンヌ=ダルクの果たした役割は？なぜ、処刑されたのか？

4 ワークシート 1 step5・6参考資料

※実際の実践では、「6 参考資料」を基に、百年戦争の略年表と人物紹介の補足紹介資料も用いて下記の資料を理解する学習活動の手助けとした。

※また、『欧州共通教科書』には下記以外に、身分制や社会制度、都市や農民に関する記述があり、生徒のたてた視点に応じて、適宜、個別に紹介した。

※「ジャンヌ=ダルク」「ジャンヌ・ダルク」の表記は、参考資料の表記に準じており、統一していない。

<『欧州共通教科書』の百年戦争の記述（第5章危機とルネサンス 3政治と行政 より）>

1 ヨーロッパの領土の変遷（本文の一部）

西ヨーロッパにおける国民国家成立の歴史において、最も重要な役割を果たしたのは、この頃のフランスとイギリスとの関係である。両国の政治・経済活動は、百年戦争（1337-1453）によって大きく左右された。「百年戦争」は、実際には短期間の戦争と長い休戦期間が繰り返されたのだが、この史上初のヨーロッパ規模の紛争は英仏両国のほかにも、アラゴン、カスティリヤ、アンジュー、ブルゴーニュ、スコットランドを巻き込んだ。この紛争の起因は、純粋に封建的問題であった。ノルマンディー公ウィリアム征服王の子孫である歴代イングランド王は、ノルマンディーに所有する領地からすると、相変わらずフランス王の封臣の地位にとどまることになる。しかし1066年以来、婚姻による同盟を重ねながら、イングランド諸王は大陸におけるイングランドの所領（アンジュー、ギューイエンヌ）を着々と増やしていったが、フランス王に対する臣従の義務を更新せずすませようと苦勞を続けていた。こうしてフランス王フィリップ6世（在位1328-50）が英領ギューイエンヌを奪回したのを契機に、戦争が始まった。この百年戦争の末期（1429年）には、ジャンヌ・ダルクが出現し、フランスの愛国心を目覚めさせた。

この頃ライン川とロース川の間、新しい政治実体としてブルゴーニュが形成された。フランス王ジャン2世善良王（在位1350-64）は、親族封として次男のフィリップ有胆公にブルゴーニュ公領を授封した。英仏間の紛争のさなか、ジャン2世の長男で後継者のシャルル5世（在位1364-80）はフランドルを支配下に治めようと心をくだいて、弟のフィリップ有胆公と、フランドル相続人で女伯のマルグリット・ド・マールとの結婚を実現させた。この結婚が後のブルゴーニュ公国の基礎を築いた。1400年頃からブルゴーニュ公は結婚や相続により（フランシュ・コンテ、フランドル、アラス、ブラバント、リンブルフ、ホラント、ゼーラント、エノー）、もしくは購買により（ナミュール伯領、ルクセンブルク公領）、多くの所領を獲得した。ブルゴーニュ公はこれらの領地だけではあきたらず、それにリエージュ、カンブレ、ユトレヒトの各司教領を加えたいと望んだ。こうしてフィリップ有胆公の夢は実現されることになる。しかし、有胆公の孫フィリップ善良公の息子シャルル突進公（豪胆公）のさらなる野心に対し、フランス王ルイ11世はこれをあくまでも阻止しようとして戦端を開いた。1477年、ナンシーの戦いで、シャルルは討ち死にし、歴代のブルゴーニュ公の夢はついに果たされなかった。

2 百年戦争（解説）

フランス人は、女系の王位継承権を認めなかった。そのためにフランス王家から嫁いだイザベラの息子、イギリス王エドワード3世は、カペー王位への権利をことごとく否認された。エドワードのフランス王位継承権の主張から始まった百年戦争だが、スリュイス沖の艦隊全滅（1340年）、ボワティエでのフランス王捕虜（1356年）…と、緒戦はフランス側の惨敗だった。敵対する両国は疲れ切り、1360年やむなく和睦した。その結果、カレーも含めてフランス南西部のすべてがイギリスに委譲され、平和が35年ほど続いた。しかし、アルマニャック派とブルゴーニュ派の抗争により再び戦端が開かれた。アザンクールのフランス軍敗北（1415）、フランス王の発狂、王妃の裏切りなどがあり、1420年トロワの和約が結ばれ、フランスはイギリス人の手にゆだねられた。その後、ジャンヌ・ダルクの奇跡的な働き（1429-31）に励まされ、フランス王太子と軍隊は自信を取り戻した。ランスで即位した王太子はシャルル7世となって内戦を終結させ、軍隊を再編し、1429年から1453年までにフランスからイギリス軍を一掃した。

3 封建国家から近代国家へ（本文）

このようにして、14・15世紀のヨーロッパは、政治地理上の大変革を経験した。この領域的変動により、新しい国家運営機構が生まれ、12・13世紀の封建体制に由来する諸制度は新しい統治形態に取って代わられた。

古い形態と新しい形態が重なり合うため、ある一線で時代を区分するのは難しい。つまり、行政は封建的慣習とリスクを伴う忠誠によって行われるが、これは個人と個人の排他的な1対1の結びつきを前提としている。封臣と封主は下から上に階層ピラミッドを構成し、頂点に王が君臨する。国家を制度として成り立たせていたのは、こうした相互に結びついた複雑な小権力の網の目だった。この構造が変化し始め、君主の利害は貴族の個々の利害と一致しなくなり、全国民の利害と重なるようになった。

こうしてローマ法にとって不可欠な「公益」という観念が再浮上し、君主はその家臣の利害について連帯責任を負うことになった。家臣はもはや、封建的階層制の中に場所を割り当てられた個人ではない。彼らは今後はある集団の、当時「身分」と呼ばれた社会階層の一員となった。

こうした身分ごとの分類の中で、新しい集団、都市の（富裕な）市民層の存在が明確になった。これ以後、人々は聖職者と貴族と市民の三つの身分に別れたが、大多数を占める都市と農村の下層民大衆は、この3身分のいずれにも属さなかった。

これらの身分を代表する議会、すなわち身分制議会は単に君主の意思を聞くだけにとどまらず、自分たちの存在を認めさせた。このため君主は、租税引き上げにはこの議会の承認を必要とした。権力はもはや一方的に行使されるものではなく、君主は、特許状によってその権限が規定される3身分と、権力を共有するようになった。

しかし、この身分制議会は、政治的代表を担ったり、統治行為を実践する、といった目的までは持っていなかった。彼らの役割は、君主の権力増大を抑えるため、自分たちに認められた特権を守ることだけに尽きた。

この新しい行政機構は、国によって多少の相違があるものの、ヨーロッパで一般化した。個人間のつながりから集団的連帯への移行は、ときとして、のちに国民意識と呼ばれる感情を生み出すことになる。

しかしこの「国民意識」は、イギリスの顕著な例を除いて、一国の文化的結集力が生み出す価値に基づくものではなかった。フランス王国の住民は、自らをフランス人というより、フランス国王の臣下であると意識していた。この当時、「ナショナリズム」と見なされる感情は、他国の攻撃に対して抵抗しうる一集団の結束意識の中に現れるものだった。（中略）

他方、ヨーロッパに、政治的・地理的に境界を限定された国々が形成されたことで、教皇やときに皇帝を後ろ盾にして結ばれたキリスト教世界の終焉が決定的となった。

国家の役割が拡大するにつれ、君主は直属の役人を周辺に集めるようになった。これらの役人は多くが小貴族や市民層の出身で、国政のあらゆるレベルに関与した。例えばフランスでは、「バイイ」と呼ばれる行政官が国王の名において、司法・行政などの公務を引き受けた。王宮にはこの他に、大学を卒業した法学者や経済人が参集した。

これらの国政業務の増加と有能な役人の登用は、王政の影響力を伸張させることになり、王宮の役人は自らが、国王個人より王国そのものに結びついているのだと考え始めた。その上、常備軍隊の創設により中央権力が強化され、富裕な商人は国王に貸付金を提供し、傭兵の給与に充てさせた。

14・15世紀の間、国家はある一定の過程を踏んで発展する、という経過をたどることができず、百年戦争のような困難な時期が発展にブレーキをかけた。王権の強化が実現されるには、戦争の終結を待たなければならない。フランスでは、ルイ11世（在位1461-83）とその後継者が、近代国家を形成することに成功することになる。イギリスでは、ヨーク、ランカスター両家が王位を争った「ばら戦争」で貴族が疲弊したのにつけ込み、テューダー朝のヘンリー7世（在位1485-1509）が王権を強化することになる。

英仏両国と同じく封建国家から近代国家への移行が試みられながら、ブルゴーニュ公国の場合は違っていた。ブルゴーニュ公国は、同じ君主の下で自治権を認められた複数の主権国からなる連合体で、秩序だった行政府が整備されていた。権限強化に努める歴代ブルゴーニュ公は、貴族層から選んだ代理人たちにそれぞれの領地をゆだね、彼らを補佐する機関として評定院と身分制議会を設置した。自らの所領をより良く組織化するべく、ブルゴーニュ公は大法官府、大評定院（最高裁判所に相当する政府機関）、財務管理を統括する会計法院を設立し、さらに「三部会」に3身分（貴族、聖職者、市民層）の代表者を招集した。

シャルル突進公は、1477年フランス王ルイ11世に敗れ、ブルゴーニュの夢はついでさるが、ここに実現された諸機構は、のちにヨーロッパ各国に影響を及ぼすことになる。

5 参考資料

5-1 ワークシートに引用したもの

- ・『ヨーロッパの歴史 欧州共通教科書 第2版』
フレデリック=ドルーシュ総合編集・木村尚三郎監修・花上克己訳
東京書籍 1998
4「ワークシート1 step5・6参考資料」に使用。現在は中古本のみ入手可。
ヨーロッパの12カ国14名の歴史家が執筆したもので、世界28カ国語に翻訳されている。内容は先史時代より現代までのヨーロッパ史を広く扱っており、図版・史料が豊富なため、ヨーロッパ史全般に参考となる。ただし、ヨーロッパの教育機関での採択状況などは不明。
- ・『百年戦争-中世末期の英仏関係-』城戸毅 刀水書房 2010
(ワークシート1 step5 ほか)
- ・『詳説 世界史B』山川出版社 (ワークシート2 資料A)
- ・『新世界史B』山川出版社 (ワークシート2 資料B)
- ・『世界史B 新訂版』実教出版 (ワークシート2 資料C)
- ・『世界史B』東京書籍 (ワークシート2 資料D)
- ・『新詳 世界史B』帝国書院 (ワークシート2 資料E)

5-2 ワークシート作成にあたり、参考にしたもの

- ・『英仏百年戦争』佐藤賢一 集英社新書 2003
- ・『カペー朝』佐藤賢一 講談社現代新書 2009
- ・『ヴァロワ朝』佐藤賢一 講談社現代新書 2014
- ・『世界史との対話 70時間の歴史批評 (上)』小川幸司 地歴社 2011
- ・『世界の歴史 10 西ヨーロッパ世界の形成』佐藤彰一・池上俊一 中央公論社 1997

5-3 メモリーツリーの作成法について

- ・第一学習社 Support Box
<http://www.daiichi-g.co.jp/chireki/globalwide/box020.html>

5-4 映像資料 ※ジャンヌ=ダルクの表記はいずれも、原題(日本語タイトル)にあわせた

- 実際の実践では、一部クラスでは、映像資料を20分ほど用いて、生徒の理解の手がかりとした。現在では入手不能なものや、授業への利用が難しいものもあるが、参考として記載する。
- ・NHK『そのとき歴史が動いた』2003年9月10日放映分
「ジャンヌ・ダルク 戦いはわが愛の証～裁判記録が明かす聖女の真実」
コンパクトに百年戦争の概要とジャンヌ=ダルク裁判がまとめられてる。本実践では、この番組の一部を利用したが、現在は入手困難。(DVDなし・NHKオンデマンドやNHKティーチャーズ・ライブラリーにもなし)ただし、コミカライズ化はされている。(『NHK「その時歴史が動いた」コミック版 世界英雄編・ホーム社漫画文庫 2005)
 - ・映画『ヴァージン・ブレイド ジャンヌ・ダルクの真実』カナダ 1999
上記、『その時歴史が動いた』の再現VTRで使われた、リーリー・ソビエンスキー主演によるカナダのテレビ映画。生徒が抱きやすい「聖なる乙女」「悲劇の少女」のイメージに近いジャンヌ=ダルク像である。日本語吹き替え版はVHSでしか販売されておらず、レンタルビデオ等でしか視聴は難しい。DVDは英語版のみ販売されているが、再生機器によっては視聴できない。
 - ・映画『ジャンヌ・ダルク』フランス・アメリカ合作 1999
ミラ・ジョボヴィッチ主演、リュック・ベッソン監督の映画。ジャンヌ=ダルクを一人の少女として描いている。DVD・ブルーレイ共に入手可能。ただし、過激な描写が所々にあり、授業で用いるのには配慮が必要。また、描かれているジャンヌ像は、見る者によっては賛否が分かれる。